

友達とキャンパスで会いたい

出会えていたはずの友

密になるからオフラインはダメ

就活…公私の入り交じった姿が画面に

Webex、Zoom チャットなら
質問しやすい?

春学期の混乱

癒しは家庭菜園

目の前にある機会を大切に

入学した実感がない

国際教育寮で試行錯誤

何もしないことへの焦燥感

新たな発見

コロナ禍と対峙

～学生記者4人が寄稿～

社会に未曾有の状況を引き起こしている新型コロナウイルス。

中大生の学生生活にもさまざまな影響が生じています。

「HAKUMON Chuo」の学生記者4人が、悩みや、苦勞する中での新たな発見、

日々感じていることなど、率直な思いを記しました。

「オンライン」だからこそ 得られるチャンス

法学部3年 山口 真歩

チャイムが鳴るか鳴らないかという頃に、教員が教壇に現れ、マイクの準備を始める。今日の第一声は何だろうか、出席は取るのだろうか、試験範囲はいつ発表してくれるのか…。

こうした、学生時代ならではのドキドキ感は、消えてしまった。

今は、授業開始時間になったらWebexやZoomのミーティングルームに入る。または空いた時間に録画動画を視聴する。ボタンを押して始まり、そして終わる。春学期の混乱を経て、学生も教員もオンライン授業やデバイスの使い方に慣れてきた。チャットなら質問をしやすく、移動時間と交通費も節約できる。メリットはそれなりにある。

とはいえ、本来だったら行えるはずのゼミ活動、サークル活動、課外活動、留学…。出会えていたかもしれない友人、先生、仲間…。人と交流する機会が減ってしまったことを残念に感じている学生は多いだろう。暗い話題や悪影響に目を向けがちではあるが、本稿ではオンラインならではの良い点も取り上げたい。

可能性高まった著名人と 直接会話の機会

私は最近、対面では可能性は低いが、オンラインならチャンスが格段に高まる、ある事柄に気が付いた。それは著名人や講演者、社会の最前線で活躍する人と直に話す機会である。

先月、私は学生向けのとある講演会

にZoomで出席した。複数の講演者はどなたも素晴らしい経歴を持ち、さまざまな業界で活躍されている方々だった。講演終了後に座談会があり、15人ほどのグループに分かれて15分間の質問タイムになった。

このときの話者は、業界で有名な40代の経営者。「質問がある方はどうぞ。何でも答えますよ」。学生2人が質問し、残り約5分となったとき、私はミュートを解除し、思い切って質問した。詳しい内容は控えるが、私の質問に沿って話してくれた言葉に多大な勇気をいただいた。

この例のように、オンラインならば普段は絶対に会えないだろうという人と話すことができる。そのチャンスは従来のような対面型の講演会よりも、格段に高い。その理由は3点ある。まず、オンラインでは発言した者、質問した者が最優先されるということ。次に、他人の目を気にする必要がない。終了後、退室ボタンを押せば再び自分の世界に戻る事ができる。最後に、時間とお金の心配をする必要がほとんどないということだ。

そして、実際に話したという体験、感動は、自身の考え方や今後の行動の仕方をより良いものに変える力になるだろう。

「前向きに」「何でも楽しむ」

先日、久々に足を踏み入れた多摩キャンパスは静まり返っていた。セント



1年前は、まさか大学が空っぽになるなんて、全く予期していなかった。

吐く息の白い朝、かじかんだ手でアパート下の収集場に八王子市指定の青いごみ袋を捨て、六法と教科書でやたら重い荷物を背負い、自転車にまたがる。立ち漕ぎをしながら坂道を登ってゆくと、冷たい風で指の感覚が麻痺する。手袋をすればよかったと少し後悔し、やっとのことで坂を登りきる頃には、心臓から熱い血液がバクバクと流れる鼓動を感じる。駐輪場に自転車を止め、青になった横断歩道を学生集団に紛れて渡る。

美しい曲線を描くラバースヒルを左手に、8号館の大会堂へと向かう。今日は8201だったか、8204だったか…。出かける前に確認したはずなのに、再びスマホを開き確かめる。

消えたドキドキ感

もう、ちらほら学生が着席している。レジメに目を落としながらパンをかじっている者、友人にノートを見せてもらっている者…。1限はまだ暖房が十分に効いていないのでコートは脱がずに着席し、鞆から教科書を引っ張り出す。

ラルプラザ(図書館と食堂の間)で音楽に合わせて練習していたダンスサークルの姿はなく、人でごった返していたヒルトップ(食堂)は真っ暗で、銀行のATMに並ぶ学生の列はなかった。

以前の大学生活と違うが、こんなとき、思い出す言葉がある。

A pessimist sees the difficulty in every opportunity; an optimist sees the opportunity in every difficulty. —Winston Churchill

今できることは、目の前にある機会を

大切にすることだと思う。「オンライン化」という社会の流れは、私たち学生にとって大きなチャンスである。いつかまた活気あふれる大学で、懐かしい友人たち、先生方に再会できる日を待ち望みながら、きょうもパソコンで授業を聴く。講演会では、少し勇気を出して質問してみる。

こうした学生生活も、見方によっては、とても貴重かもしれない。大切なのは、物事を前向きに捉え、何でも楽しむことなのだと考えている。



登校できずとも… 新たなコミュニティーはつくれる

総合政策学部1年 西沢 美咲

私は2020年春、中央大学に入学しました。といっても、入学式は新型コロナウイルスの影響で中止となり、入学した実感がないうままオンライン授業を受けることになりました。

オンライン授業に対する不安もありました。授業に関するなど大事な情報は、ほとんどがオンライン上で発表されていきます。学校に行き、わからないことがあれば周りの人に聞くという、今までの高校時代なら当たり前でできていたことができず、自分で情報収集をする必要がありました。

履修登録では、大学の授業や履修の組み方についての知識もなく困惑し

ました。幸い私は、高校の部活の先輩に履修について相談できたので、とても助かったのを覚えています。また、SNS上で履修相談に乗ってくださる先輩方が多くいたのも印象に残っています。見知らぬ1年生にも関わらず、親身に履修相談にのってくれました。

SNS活用、 履修相談やサークル新歓

先輩だけでなく、私たち1年生の“つながり”もできたように思います。同じ学部の人同士で情報を共有したり、わからないことを聞き合ったりなど、キャン

パスで会えない中でもSNSを活用して工夫をしていました。

SNS上では、運動部や文化部、サークルなども、オンライン新歓やオンライン説明会といった取り組みを1年生のために企画してくれていました。そこで、先輩方や同級生と交流する中で、オンライン授業の息抜きになっていたような気がします。大学に行けない状態でも、新たなコミュニティーを作ることができる、そのとき感じました。

「今年の1年生は学校に行くことができずにかわいそう」と言われることもあるのですが、私はそんなことはないと思います。私の所属する総合政策学部

では英語や第2外国語などの語学の授業が多く、グループセッション機能やブレイクアウトルームを使ったグループワークなどが積極的に取り入れられています。先生がシャッフルでグループを組んで、いろいろな人と意見交換ができるので、ほとんどの人と仲良くなれました。

積極的に「自分から」が大切な姿勢

また、テストの代わりにレポートやプロジェクトを作成して提出する機会が多く、覚えるよりも考えることが増えたと感じています。自分で考えて、それで

もわからなかったら先生や友達に相談するというように、「まずは自分で」という姿勢が身に付いたように思います。

こうしたことから、オンライン授業は自分次第で理解を深められ、充実したものにできると感じました。もちろん、実際に大学に行きたいという思いがあります。親身に相談に乗ってくれた先輩や先生方、授業で親しくなった友達と実際にキャンパスで会ってみたい。何の心配もなく通学できるようになったら、教室で先生や友達と顔を合わせて授業を受け、食堂でご飯を食べるといったようなキャンパスライフを送りたいです。

この原稿を書きながら、こうした環境の今年だからこそ、「自分から」という姿

勢が大切なのではないかと思いました。SNS上のつながりや、授業でのグループワークなど、大学に行けなくても、つながりをもてる場はたくさんあります。そこで、自分からコミュニケーションを図り、交流を深めることが大切でしょう。

先輩方に支えられたり、同級生に助けられたりすることが多くあり、オンライン授業を自分一人で乗り切ろうとしていたら、飽きてしまっていたかもしれません。周りの人とのつながりを大切にしながら、4年間の大学生活を充実したものにしていきたいと思います。



今年4月、多摩キャンパス内に新設された国際教育寮に私は住んでいる。1期生として、期待に胸を膨らませて入寮したものの、コロナの影響で予期していたものとは全く違った寮生活となった。しかし、さまざまな試行錯誤を繰り返して、コロナ禍に負けまいと、日々の生活を送っている。

国際教育寮での交流に工夫 オンライン就活に不安も

総合政策学部3年 齋藤 優衣

寮内「ユニット制」に 試行錯誤

英語サークルの活動で、国際交流や異文化理解に楽しみを見出していた私は、新しい寮ができると聞き、すぐに興味を抱いた。別の国際寮に住む先輩から話を聞いて、共同生活を通じて学ぶことがたくさんあると知っていた。多くのことを学べる機会になると思い、入寮を希望した。

寮では6人が1つのユニットの中で暮らすユニット制を取っている。日本人学生と留学生が必ず同じユニットに入り、キッチンやシャワールーム、洗面台を共有。当然、共同生活でのルールやマナーといった決まりが必要になる。文化や生活様式が異なる中で、お互いの文化を尊重し、多文化理解を深めることが国際教育寮の目的である。

現在入寮しているのは日本人学生が大半だ。入国制限もあり、入寮してい

る留学生は約20人という状況にある。入寮済みの日本人学生もさほど多くなく、本来6人が住むはずが1、2人しか住んでいないユニットもある。寮内では対面での集まりを可能な限り控えており、寮生同士が関わる場面は限られる。

共同生活は「学びの連続」

こうした状況を改善しようと、後期から「疑似ユニット制度」を取り入れた。異なるユニットの寮生同士がオンライン上で集まり、もう一つのユニットとして交流を図る。寮生活の不安、悩みなどを定期的に語り合い、それらを少しでも減らすのが狙いだ。

こうしたアイデアは、寮のまとめ役である「レジデント・アシスタント(RA)」が担っている。RAは、寮生が快適に暮らせるよう、留学生の生活サポートや、寮生活のルール策定、イベント企画などの役割を受け持つ寮生のまとめ役。私もRAの1人として、広報や、共有キッチンの美化活動、八王子市と連携

したSDGsに向けた取り組みの企画などを担当し、幅広く寮の運営に関わっている。

寮内の交流が制限され、当初は悲しく思っていたが、コロナ禍だからこそ工夫を凝らした活動もできた。寮に帰れば誰かがいると感じられ、学年・学科を超えて友人ができたことにも安心感があった。共同生活を送るというのは学びの連続である。入寮してよかったし、これから先も、国際交流をより深められる日々を楽しみにしている。

就活…ほかの学生の動向が分からない

現在3年生である私の就職活動についても話したい。一番強く感じるのは、同じ年代の学生がどのような状況にいるのかが全く分からないということ。これまではキャンパスで友人と話し、近況や悩みを共有できた。そうした機会が減り、就活への不安も一段と増している気がする。テスト前などに「私、全然

勉強してない」といった声を聞くと、「自分だけじゃない」と安心するように、何げないコミュニケーションが実は大事なのだ。

インターンシップや企業説明会の多くはオンライン開催だ。ホームページや就職活動サイトの口コミをみて、どのような企業か、自分に向いていそうかを見極める。

交通費や移動時間が減って効率はいい半面、画面上でのやり取りで完結してしまうため不安も大きい。インターンシップでは、リクルートスーツを着た学生が自室から参加する形となり、「パブリックな姿」「プライベートな姿」が入り交じった何とも不思議な光景が広がっている。画面映りを気にして照明器具を購入したという友人もいる。

経済活動の停滞に伴う採用人数の減少も気になり、先を見通せない。気が抜けない状況が続くが、まだ長い内定への道のり。友人とも連絡を取りながら、頑張っていきたい。

これまで散々だった今だからこそ分かること

怒濤の一年

2020年は世界中の誰にとっても怒濤(どとう)の年であった。今までのものとは比べ物にならない規模の感染症の蔓延(まんえん)は、多くの人の生活を縛りつけ、混乱させた。私もその中の1人だった。元々家で過ごすことが大好

きな私でさえ、今年の自粛期間は心が減入るものだった。

何もしない毎日に焦り

そして何より外へ出ることへの恐怖

文学部3年 澤島 彩香

が大きかった。去年のうちに「大学3年生になったらやりたいことリスト」を作っていたため、何もせず日々が過ぎるのが一番の苦痛だった。「何か成し遂げなくては」という焦燥感から、さまざまなことに挑戦し、見えない敵、コロ

ナと自分なりに闘っていたように思う。そんな私の「対コロナ生活」を紹介したい。

今年2月から1カ月間、オーストラリアのメルボルンへ短期留学に行った。当時はコロナウイルスという言葉に対して「最近よく聞く言葉」程度の認識であった。しかし、マスクをしている人はメルボルンの街中にわずかながらもいた。アクセサリー店にマスクをせずに入店した際は、店員に少しにらまれている気もした。

この頃のメルボルンは活気に満ちあふれて、私たち留学生にとっても優しい街だった。マスクをしていなかったからこそ見られた現地の人々の笑顔をこれからも忘れずに、いつかまた訪れてみたいと考えている。

留学の余韻に浸る暇もなく、帰国してすぐに自粛生活が始まった。焦燥感に駆られた私がまず取り組んだことは、家庭菜園だった。家の倉庫にあった5つの植木鉢と、培養土を引っ張り出し、ベランダに菜園を作った。育てる野菜はアボカドに決めた。

スーパーで買ったアボカドの種を取り出し、土に植える。今では高さ33センチほどの大きさに成長している。なぜアボカドだったのか、なぜ家庭菜園に取り組んだのか。今では分からない。

アボカドの成長が癒しに

唯一言うならば、何もない日常にけじめをつけたかったのかもしれない。窓の外に着々と成長している植物がある。それを見ると、日々が確実に過ぎていくことを実感できる。“彼ら”の成長は私にとっての癒しとなっていた。アボカドのほか、今ではレモンやサボテンの栽培にも挑戦している。家庭菜園、おすすめです。

“家庭菜園生活”も身に染み付いてきた4～5月、オンライン上でサークル活動が徐々に再開された。しばらくの間、家族や植物以外と対話していなかった私にとって、久しぶりのサークル活動は大イベントであり、ワクワクするものだった。

私は部員が400人ほどの「NAOKAN」

というダンスサークルに入っている。普段は多摩キャンパスのペデストリアンデッキなどで練習しているが、「密」になってしまったため、オフラインでは集まれない。私たち3年生が活動できる最後の年だったのに、4月の新入生歓迎会(新歓)の中止が決まったときは正直ものすごく悔しかった。

同期との心のつながり

夏のイベントや学園祭の実質上の中止が立て続きに決まり、3年生にとっても後輩にとっても酷な時期だった。各自が踊っている動画を撮影し、編集でつなげることで1つの作品を制作することにした。

しかし、やはり互いの顔を合わせ、ともに作品を作ることがダンスの魅力だと痛感し、サークルで出会った同期の存在の大きさに気付いた。上級生の幹部は、1年生を楽しませようと、オンライン企画を考え、運営に全力を尽くしてくれた。活動がない期間も、同期たちに連絡すると憂鬱だった気持ちが消え、心のつながりを感じられた。NAOKANに入って正解だった。

怒涛の一年は就職活動にも影響している。インターンシップや面接はオンラインが当たり前。このような状況だからこそ、「自分から探して初めて分かること」もあるだろう。それは次の目標であり、今まであったものへの感謝でもあると思う。

この年は散々だった。しかし自分の人生にとって不可欠な期間であったと、今は思うことができる。



▲ダンスサークルの仲間とミーティング。上段左から2番目が澤島さん

目指すは世界の頂点! 「キング・オブ・スキー」

スキー部の新鋭2人、未来を語る

ノルディック複合 木村 幸大選手(法1)、畔上 祥吾選手(同)



木村 幸大(きむら・こうだい)選手

165センチ、59キロ。秋田・花輪高卒、法学部1年。秋田県鹿角市出身。全国高校スキー大会ノルディック複合優勝(1、3年時)。国際スキー連盟のサイトで、有望な「知っておくべき選手」としてインタビューが掲載されている。

畔上 祥吾(あぜがみ・しょうご)選手

174センチ、60キロ。長野・飯山高卒、法学部1年。長野県野沢温泉村出身。全国高校スキー大会ノルディック複合2位(1、3年時)。

今年2月の全国高校スキー大会のノルディック複合で優勝、準優勝した木村幸大、畔上祥吾両選手がこの春、中央大学法学部に進学し、スキー部に入部しました。ノルディック複合の世界王者に与えられる称号「キング・オブ・スキー」が2人の究極の目標です。

ともに2020~21年の全日本スキー連盟強化指定選手に選ばれた、世代を代表するアスリートである2人の挑戦、チームメートとしての切磋琢磨はスタートしたばかり。入学して半年が過ぎた2人に将来の目標や夢を聞きました。

(取材は10月5日にオンラインで行いました)

ジャンプ+クロスカントリー 幼少期から取り組む

——ノルディック複合(以下、複合)を始めるようになったきっかけはありますか

畔上祥吾選手(以下、畔上)「最初はアルペン種目を始めたんです。小さな子供を対象としたジャンプ大会で良い順位が取れて、楽しいかもしれないと思い、練習に参加するようになった。ジャンプを始めた子供はクロスカントリーもやるというコンバインド(複合)の流れがあり、必然的にやるようになりました」

木村幸大選手(以下、木村)「兄の影響を受け、小学3年のころにジャンプを始めました。畔上と同じように

ジャンプを始めると、コンバインドもという流れの中で自然にやりました」

畔上選手は、双子の姉と祖父、父親のいずれもが複合選手、母親はクロスカントリーというウインタースポーツ一家。幼少時から自然とスキーに親しむ環境にあった。同じ複合選手の3歳年上の兄の影響が大きかったと振り返る木村選手は、父母がともに陸上の長距離種目の選手で、こちらもスポーツ一家の血を受け継いでいるといえる。

——複合の魅力や、観戦する側の見どころは

畔上「前半ジャンプ、後半クロスカン

トリーという特性の違う2つのスポーツが合わさった大変なスポーツ。その大変さを乗り越えて優勝することに一番の達成感を覚えます」
木村「ジャンプで失敗してもクロスカントリーで追いかけて勝負したり、ジャンプでリードを奪ってクロスで逃げきったりと、レース展開はなかなか読みづらい。競技する側の自分でもそこが面白いところだと思っています。ルールもシンプルでゴールした順という点も分かりやすい」

「クロスの走力」 2人の強み

——複合のアスリートとして自分の強みは



ノルディックスキー

ヨーロッパのアルプス地方で1920年代から盛んになったとされる滑降、回転系種目のアルペンスキーに対し、北欧のスκανジナビア地方ですで行われていた距離(クロスカントリースキー)、飛躍(スキージャンプ)、複合(コンバインド)の3種目を「ノルディック(北欧の)スキー」と呼ぶようになった。スキー板のかかと部分が固定されない点がアルペンスキーと異なる。

ノルディック複合は前半種目のジャンプのポイントを、後半のクロスカントリーのタイムに換算して競う。クロスカントリーは筋力や持久力、ジャンプは瞬発力などを求められ、総合的な運動能力が試される。ヨーロッパでは複合王者を「キング・オブ・スキー」と呼ぶ。

畔上「クロスカントリーの走力です。夏場はローラースキーを履いて練習をしています。大胆に大きな滑りをできるようにしたい」

木村「僕もクロスカントリーが強み。でもここ数年、海外での試合で持久力が全く通用しないことがあった。自信をもって得意とはいえないかもしれません」

——逆に、今の課題はどのようなところですか

畔上「ジャンプが課題ですが、今シーズンから感覚が徐々に良くなってきた。ジャンプ台への対応力とともに、自分のアプローチ（助走）姿勢を見つけることを重視しています」

木村「僕も課題はジャンプ。（踏み切りの時速）90キロ、100キロというスピードの中で体をコントロールすることに集中して取り組んでいます。」

地上練習でも、シミュレーションジャンプ（踏み切り姿勢のまま腰をコーチらに支えてもらう練習）を繰り返しています」

複合と聞いて日本人の記憶にあるのは、五輪2大会連続で団体金メダルを獲得し、W杯総合王者にも3度輝いた「キング・オブ・スキー」、荻原健司さんの勇姿だろう。ジャンプでリードを奪い、後半クロスカントリーをしのぎ切るという戦法を得意とした荻原さんに対し、畔上、木村両選手は逆にクロスカントリーを得意としている。また、2人は、荻原選手とともに団体金メダルを獲得、1994年リレハンメル五輪で個人銀メダルも獲得した全日本スキー連盟複合チームの河野孝典ヘッドコーチから直接、指導を受けた経験もある。

五輪メダリストからのアドバイス

——河野ヘッドコーチからはどんなアドバイスを受けたか

木村「昨年のワールドカップ（W杯）で本格的に指導を受けました。五輪でメダルを取ったり、若いころにドイツで学んだり、豊富な経験に基づくテクニックの指導が身になっています」

畔上「8月に指導していただき、ジャンプ力をだいぶ向上できたと思っています。白馬（長野県白馬村）のジャンプ台で、アプローチの体の使い方について指摘されました」

——2人とも海外大会への出場経験がありますが、外国人選手と日本人選手の違いは感じますか。彼らに勝つためにすべきことは何ですか

▼ローラースキーを履いた練習で脚力を鍛える木村幸大選手





▲シミュレーションジャンプの練習をする畔上祥吾選手

木村「テクニックの差を感じます。外国人選手は(降雪期間が長いので)僕らより雪に乗って練習する時間が長く、こういったところにも感覚の差が生まれている。(夏場は)冬をイメージしながら、エクササイズや、コンディショントレーニングをトレーナーと相談して増やしています」

畔上「ハングリー精神です。クロスカントリーでは、意地でもコースを譲らないとか、あわよくば競走相手のスティックを折ってでも自分が前へという意識、威圧感がある。気持ちで負けないようにしたい。クロスカントリーではコースによって、どこで前に出るか、スパートをかけるかなど、勝負どころが違う。駆け引きが大事です」

目標は五輪メダリスト、W杯総合王者…

——目標としている選手、あこがれ

の選手はいますか

木村「2季連続でW杯総合王者となったヤール・マグヌス・リーバー選手(23歳)＝ノルウェー＝です。ベテランが強い中で、若くして王者となったところが衝撃的でした。常に世界のトップ選手を目標としたい」

畔上「W杯で総合優勝し、日本のトップに立っている渡部暁斗選手です。競技以外でもコミュニケーション能力をとて高く感じます。インタビューを見ても言葉に説得力があります」

——アスリートとしての将来の目標や夢を教えてください

木村「オリンピックで金メダルを取ることと、世界選手権での金メダルと、W杯の総合王者。ちょっと欲張りですけど、この3つを達成して、キング・オブ・スキーの称号を得るのが小さいころからの夢。いまは目標です」

畔上「将来の夢はオリンピックのメダリストになること。いまだ日本勢(個人)は銀メダルが最高ですが、そこを金メダルに塗り替えたい。それが一番の目標というか夢です」

同じスポーツに打ち込み、高校時代から試合場などで顔を合わせるうちに自然と親しくなっていた2人。一緒に中大に進学しようと、どちらからともなく相談していたという。2人はまだ、多摩キャンパスや寮を訪れたことがなく、実家で暮らしながらオンラインで授業を受け、ローラースキーやウエートトレーニングなどの練習に取り組んでいる。

スキー部には現在、複合の先輩は在籍していない。監督やコーチの指導の下、練習メニューなども、ある程度は自分たちで考えて練り上げていく必要があるようだ。

複合の先輩がいない スキー部で切磋琢磨

——春からスキー部のチームメートとなりました。お互いをどう見ていますか

木村「特別に今になって変わったことはありませんが、目指すところは一緒なので相談し合うことも多い。切磋琢磨していきたい」

畔上「(木村選手は)走力が高く、僕ももっと頑張らないと思わせてくれる。競技以外のことで、考え方にも感心することがあります。的確なアドバイスでチームメートとして頼りになる存在。一緒に強くなっていきたい」

——中大に進学した理由、また決

め手となったことはありますか

木村「五輪クロスカントリーで6位入賞という実績のある今井博幸監督の下で練習したいというのが決め手のひとつです」

畔上「スキーを辞めた後は、実家の旅館経営の道に進もうと考えたとき、中大で法律や経営を学ぶことが自分に合っていると思いました。複合の先輩はいませんが、自分たちでイメージして考えながらやっていく環境もいいと思っています」

木村「先輩がいない中で、自分たちで考えて動いていく。2人で話し合い、あえて先輩のいない中大スキー部を選びました。上下関係のない中で、すべては自分たち次第となり、厳しい環境だとも思っています」

コロナ禍で練習に影響はあるの

だろうか。2人とも実家でオンラインで授業を受けながら、練習もこなしている。畔上選手は「ポジティブに練習に取り組んでいます。白馬のジャンプ台で飛んだり、地元のトレーニングセンターでウエートトレーニングやローラースキーをしています」と、練習上の不便は感じていないようだ。

木村選手も「兄も実家でオンライン授業を受けていて、一緒に練習する機会も多い。市内のジャンプ台で飛べるのも大きい」と話す。今シーズンの個々の大会の開催がコロナ禍で見通せない状況にあるが、国内の大会以外でも「W杯や、一つ下の大会のコンチネンタルカップに参加していきたい」という。

冬季五輪、世界選手権における ノルディック複合の日本選手の活躍

〈五輪〉

1992年アルベールビル大会 団体金メダル 日本(三ヶ田礼一、河野孝典、荻原健司)

1994年リレハンメル大会 団体金メダル 日本(河野孝典、阿部雅司、荻原健司)

1994年リレハンメル大会 個人ノーマルヒル銀メダル 河野孝典

2014年ソチ大会 個人ノーマルヒル銀メダル 渡部暁斗

2018年ピョンチャン大会 個人ノーマルヒル銀メダル 渡部暁斗

〈世界選手権〉

1991年大会 団体銅メダル 日本(三ヶ田礼一、阿部雅司、児玉和興)

1993年大会 個人金メダル 荻原健司

1993年大会 団体金メダル 日本(河野孝典、阿部雅司、荻原健司)

1995年大会 団体金メダル 日本(阿部雅司、荻原次晴、荻原健司、河野孝典)

1997年大会 個人金メダル 荻原健司

2009年大会 団体金メダル 日本(湊祐介、加藤大平、渡部暁斗、小林範仁)

2017年大会 個人銀メダル 渡部暁斗

2017年大会 団体スプリント銅メダル 日本(渡部暁斗、渡部善斗)



※ワールドカップの総合優勝は、荻原健司選手が1992~93年、93~94年、94~95年の各シーズン、渡部暁斗選手が17~18年シーズンに達成している。



2020年世界ジュニアでの畔上祥吾選手(左)と木村幸大選手 ©公益財団法人全日本スキー連盟 SAJ令和3承認第00109号

将来性高い2人、世界の舞台で活躍を期待

スキー部 今井 博幸監督

スキー部にはここ4年間、ノルディック複合の選手は在籍していなかった。監督は、将来の日本複合界を背負って立つだろう新鋭2人の入部を歓迎し、木村幸大選手の心肺能力、畔上祥吾選手のテクニックの高さを特長に挙げる。「将来性は非常に高く、世界の舞台で活躍できると信じている」と意を強くしている。

中大OBの今井監督は1992年アルペールビルから4大会連続でクロスカントリー選手として冬季五輪に出場。1998年地元開催の長野ではリレーで日本クロスカントリー史上初の7位入賞に貢献、続く2002年ソルトレイクシティでも50キロ・クラシカルで日本人最高の6位入賞を果たした。

畔上、木村両選手について、今井監督は「2人も研究熱心で志が高い。真摯に競技と向き合う姿勢が良い」と褒め、ジャンプについては全日本スキー選手権複合で優勝実績のあるスキー部OBの

上野隆コーチが適宜指導しており、「全く心配していない」と話す。

高校時代の実績からすでにW杯に出場し、同世代の先頭を走っている存在の木村選手には「世界選手権を足がかりに、2022年北京五輪も狙ってほしい」と期待。畔上選手も「渡部暁斗選手ら超一流選手とトレーニングを重ね、あこがれの存在に一歩でも近づいてほしい。クロスカントリーが強くないと勝てないし、そこが強みなのは心強い」と評価している。

「表彰台に上がっても、優勝できなければ負けは負け」。その悔しさを持ち続け、「忍耐をもって努力を継続する」ことを常に心がけてきたという今井監督。「強くなる秘訣はないが、勝ちたいという気持ちがある限りやっつけていける」と2人にエールを送っている。

スキー部員が次々に活躍 今シーズンも期待

冬季スポーツの2020～21年シーズンがスタートしたが、昨シーズンは中大スキー部員の躍進が目立った。今季の活躍も期待される。

高橋大成選手(法4=当時)が第98回全日本スキー選手権大会(2月11日、秋田・田沢湖スキー場)のアルペン男子スーパー大回転で初優勝を飾った。現役中大生による全日本選手権制覇は2007年以来的の快挙という。

全日本学生スキー選手権大会(2月26日、秋田・花輪スキー場)のアルペン男子1部回転では、富井大賀選手(法1)が初優勝した。

